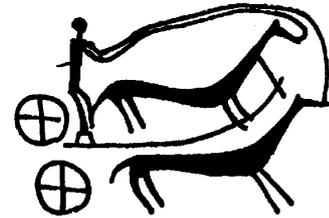


# センターニュース

Hokkaido University  
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 29



高等教育，生涯学習両研究部に新部長 .....	3
学務部ならびに研究部が移転 .....	3
センター研究発表会開催される .....	5
全学教育委員会開催される .....	6
全学教育の科目責任者からのひとこと .....	7
「歴史と文化」，「自然の構造としくみ」，「西洋古典語」，「論理学」，「生物学」 新任教官研修会のお知らせ .....	10
北大におけるTAの問題点 .....	11
北海道大学公開講座のお知らせ .....	13
シンポジウム「21世紀の大学院と職業人教育」開催される .....	13

## 巻頭言 FOREWORD

### 北大の学生をライフロング・ラーナーズに

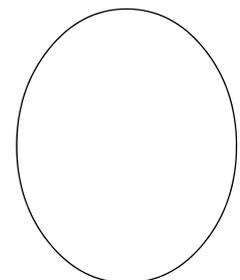
生涯学習計画研究部長・教育学研究科教授 小出 達夫

このたび図らずも生涯学習計画研究部の部長をおおせつかることとなった。今までの部長は，このセンターの専任教授が歴任してきた。山田定市初代部長，小林甫先任部長しかりである。しかし今回は専任教授が強く固辞したため，結局私のところに話がまわってきてしまい，引き受けざるを得なくなった。はなしは急であり，なんの準備もないままこの新しい仕事を始めざるを得ない。この点どうかお許しを願いたい。

なにか抱負があってもよいのであるが，まだ腹

案中で明示できるところまでいっていない。全学施設であるので，その利点を生かしていい仕事をしたいと思っている。関係するであろう人の話をよく聞きながら進めていきたいと思う。だから相談にお伺いしたときには大いに話しに乗っていただきたい。

研究部自体はごく小さい組織であるが，ユニーク



な施設であり、夢もあり、将来もある。この研究部のもともとの出自をたずねれば、それは教育学部の附属産業教育計画研究施設であった。6年前にそれを改組拡充し、いまの生涯学習計画研究部の礎とした。その由来からわかるように、もともと北海道の産業教育の企画や開発に貢献するという実践的な課題をもっていた。この伝統は今も生きている。とはいえ産業教育それ自体は規模も拡大し高度化し、いまでは大学自体がその中枢を担うところまできている。教育学部だけで担いうるテーマではもはやない。といっても産業教育を研究する固有の施設はない。当研究部はこうした課題を発展的に果たす使命をもっている。

また当研究部が、北大の高等教育機能開発総合センターの一部であることの意味を真剣に考えないといけない。かつての教養部がなくなったとはいえ、それが担っていた機能は引き継がれ、機構としてはこのセンターが責任を負うべきものとなった。なかんずく全学教育の充実がセンター長の任務であり、それをサポートする役割を当研究部も果たさないとならない。今のところこの任務を十分はたしているとはいえませんが、課題の重要性はわかっているつもりである。全学共通教育の質の向上に貢献することでセンター長を補佐したいと願っている。

さきに抱負はまだ明示できないと書いたが、仮説らしきものがないわけではない。当研究部には、大学が生涯学習機能をいかに果たせるか、と

いう問題が絶えずつきつけられる。とはいえ、生涯学習機関として北大がどれだけの力量を発揮できるかはまず学部の独自の努力に負うべきもので、当研究部がどうのこうのできるわけのものではない。学部間に共通するテーマに関してかろうじてプログラムを企画できるくらいだ。地域サイドにある学習ニーズを組織し大学がそれに応える、という式の課題の立て方ではその任に耐えないし、また面白くない。われわれ少数のスタッフでもできるテーマがよい。

当研究部はライフロング・ラーニングの施設にはなれないが、北大の学生をしてライフロング・ラーナースに育てる構想くらいならなんとかつくれぬか、ということを考えてみたいのである。学生のモラトリアムを嘆くとか、力不足を嘆くとかするのをやめて、豊かな学習の動機付けを大学1・2年の時から育てるのを援助できないだろうか。こういう努力は国内外の多くの大学で試みられている。北大の姉妹校であるポートランド州立大学でも大規模に実施されて久しい。次世代の教育を軽視する国は滅びる。教育は世代間の文化継受の営みそのものである。それは教育機関だけの仕事ではない。社会自体の仕事である。広い意味でのコミュニティに依拠した生涯学習機関として北大を構成できないだろうか、といったことを考えているのであるが、いかがであろうか。ご教示をお願いしたい。

## 高等教育，生涯学習両研究部に新部長

4月より，高等教育開発研究部，生涯学習計画研究部両部の部長がかわりました。高等教育開発研究部は医学部の阿部和厚教授が2期4年間研究部長をされ規約で満期になり，後任には専任の小笠原正明教授が選出されました。平成8年から生

涯学習計画研究部の専任部長であった小林甫教授がこの4月に大学院文学研究科に転出されることになり，後任には大学院教育学研究科の小出達夫教授が兼任することとなりました。小出教授については巻頭言を参照して下さい。

## 学務部ならびに研究部が移転

高等教育機能開発総合センターのN棟・E棟の改築にともない学務部のほとんどの課がE棟に移転いたしました。また，情報教育館が新築され，センターに新しい施設が設置されるとともに，高等教育開発研究部と生涯学習計画研究部はここに移転しました（p.16 写真2）。

E棟の1階には，従来に比較して格段に広くなった部屋に学務部のほとんどの課が移転しました（図1）。魅惑的な曲線に縁取られた窓口はエ

ントランスホールに適度な和らぎと緊張感を与えています。配置図では，右から順に学生課，厚生課，教務課，経理課分室，教務情報システム室と分けられているのがわかります。入試課は玄関をはさんで北側に配されています。

情報教育館は1階が交流ラウンジ，2階が広報センター，マルチメディア公開利用室，情報メディア教育実習室となっています。5，6階には放送大学北海道学習センターがあります。

図1. 学務部の配置

3階は言語教育用マルチメディア教室，国際文化交流活動室に加え，スタジオ型多目的中講義室，教材作成・メディア編集室，SCS講義室が設けられました（図2上）。スタジオ型多目的中講義室は120名が収容でき，通訳室と広いステージを付属した本格的なマルチメディア対応の講義室です（写真1）。将来は，隣のSCS講義室や教材作成・メディア編集室とネットワークで結ばれ，講義室でマルチメディアを利用するだけでなく，講義の様子を配信できるようになる予定です。教材作成・メディア編集室では，教材の編集をするとともにネットワークを通じて配信するビデオ・オン・デマンド（VOD）のシステムを導入する予定です。SCS講義室での衛星通信利用を含め，現在利用可能なメディアを駆使した教育の運用ができるよう考えられた教室ですが，ハードウェアは設置

されておりません。一刻も早い設置が望まれます。

4階は高等教育開発研究部と生涯学習計画研究部の教官室が配置され，試験的な授業のために実験室，調査分析室ならびに共用多目的教室(1)，(2)が設置されています（図2下）。共用多目的教室(1)は通常の講義形態に加え，フィッシュボール法（数グループが他の学生の前で討議する）など多彩な講義ができるよう配慮されています。共用多目的教室(2)は地域連携の学習を目指した教室で，将来は電話回線を通じたテレビ会議システムを導入し，国内の多数の地域と映像を結んでの講義ができるように設計されています。この部屋も，ハードウェアが整備されておらず早期の設置が期待されます。

図2. 情報教育館の3階（上図）と4階（下図）の配置図

写真1. スタジオ型多目的中講義室

## センター研究発表会開催される

第5回センター研究発表会が3月13日に高等教育開発研究部2階会議室において開催されました。午前の部は生涯学習研究部で「諸外国・国際機関におけ

る生涯学習と高等教育」という共通テーマの発表があり、午後の部は高等教育研究部で名古屋大学の馬越先生の講演などが行われました。

表1. 第5回センター研究発表会のプログラム(再掲)

<p>午前の部：生涯学習計画研究部 共通テーマ「諸外国・国際機関における生涯学習と高等教育」 9:30-11:00 コミュニティカレッジと生涯学習 町井 輝久(専任教授) アメリカの生涯学習の現状 山田 礼子(プール学院大学助教授・研究員) 11:00-12:00 イギリスにおける大学と遠隔教育 木村 純(専任助教授) UNESCOにおける&lt;ライフロング・ラーニング&gt; , OECDにおける&lt;ライフロング・ラーニング&gt; 竹内 新也(専任助教授), 小林 甫(専任教授) 町井 輝久</p>	<p>午後の部1：特別講演 13:00-14:15 大学改革と高等教育研究 馬越 徹(名古屋大学教育学部教授) 午後の部2：高等教育開発研究部 14:15-16:15 平成11年度北大授業評価 阿部 和厚(研究部長) 大学入学後に伸びる素質の評価とアドミッションズ・オフィスの役割 小笠原正明(専任教授), 阿部 和厚 大学での数学の教え方いろいろ 西森 敏之(専任教授) 米国の学部教育の現状 細川 敏幸(専任助教授)</p>
---	--

## 全学教育 GENERAL EDUCATION

### 全学教育委員会開催される

2月18日(金)に第30回(平成11年度第7回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

- 議題1. 一般教育演習に係る履修者数の調整について
- 議題2. 平成12年度全学教育科目に係るT.A.の任用について
- 議題3. 「科目等履修生」として全学教育科目を履修する場合の取扱い(案)について
- 議題4. 北海道大学高等教育機能開発総合センター全学教育委員会委員について
- 議題5. 北海道大学全学教育科目責任者等に関する要項の一部を改正する要項(案)について
- 報告事項1. 全学教育科目(コアカリキュラムの導入)の見直しについて
- 報告事項2. 全学教育科目実行教育課程表(薬学部)の一部改正について

議題1では委員長から、昨年12月に開催の本委員会において、一般教育演習にかかわる履修者数の調整を行うこととし、その方策を小委員会において検討することとなっていた旨の報告があり、続いて山口小委員会委員長から配布資料に基づいて説明があり、審議のすえ原案が了承されましたので、センター運営委員会に諮ったのちに、平成12年度の履修受け付けから実施されます。原案によりますと、一般教育演習は4月18日まで申込を受け付け、履修者を20名(上限25名)に調整することとなります。

議題2では、関係部局から推薦されたT・A任用候補者について審議し、了承されました。T・Aについては、かならず担当教官のもとで授業をおこない、TAのみの授業は認めないことが確認されました。

議題3では委員長から、「科目等履修生受け入れに係わる取り扱いについて」原案にたいする各学部での検討の経緯についての説明があり、審議のうえ了承されました。

議題4では、国際広報メディア研究科新設の内示に伴い、北海道大学高等教育機能開発総合センター全学教育委員会委員に同研究科も加えることについて諮られ、了承されました。

議題5では、平成12年度予算政府案の決定事項として、国際広報メディア研究科の新設および免疫科学研究所が遺伝子病制御研究所に改組される内示があったことに伴い、全学教育科目責任者に関する要項の一部を改正する必要があることが委員長より説明され、審議の結果原案が了承されました。

報告事項1については委員長より、全学教育科目の見直しについて、2月2日の教務委員会において大筋で了承されたが、文系における基礎科目のあり方についての意見が出されており、この取り扱いについては文系の全学教育委員会委員の中で検討することになった旨の説明がありました。

報告事項2では、薬学部が全学教育科目実行教育課程表の一部を改正したい旨の報告があり、山口小委員会委員長から説明がありました。

## \*\*\* 全学教育の科目責任者からのひとこと \*\*\*

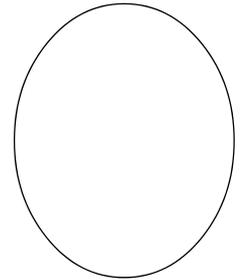
### 全学教育における「歴史と文化」

「歴史と文化」企画責任者 文学部助教授 白木澤 旭 児

平成12年度において「歴史と文化」は、28コマ（種類）の開講が、文学部専任教官19名と学外非常勤講師2名の担当者により予定されている。担当者数の多さによってそのカバーする領域は、時期的には原始から現代（第二次世界大戦後）まで、地域的には日本、中国、アラブ、トルコ、ペルシア、ヨーロッパと世界中を覆っている。また担当者の学問分野で見ると歴史学をはじめ考古学・文化人類学・美学美術史にまたがっており、他に例を見ないほど充実しているといえるだろう。

さて、全学教育としてこのように多様かつ充実したメニューを用意しているが、このことの教育的意味を考えてみたい。シラバスのなかで何人かの担当者が、対象とする時代にかかわらず現代との関わり

について言及している。その場合、過去の事実を教訓として生かす、という直接的な現代との関わりも考えられるが、むしろ過去の異質な文明・社会を知ることによって現代日本社会を相対化して見ることができるというメリットを重視したい。解決困難な問題に直面したとき、現実を「相対化」して見ることは案外むづかしい。変貌著しい時代だからこそ、これからの社会人はこうした能力を求められているのだと思う。「歴史と文化」がそのような役割を果たすことを期待し、かつ自己の抱負としたいと思う。



### 専門に偏らない全人格的教育を

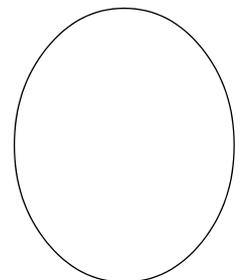
「自然の構造としくみ」企画責任者 大学院理学研究科助教授 兼古 昇

「自然の構造としくみ」は文教法経の文系四学科と医歯進の学生に開講されている理系の講義であり、1994年までの「一般物理」、「一般化学」、「一般生物」、「一般地学」を改組したものです。従って、この講義を担当する教官はそれぞれ、独自の「副題」で講義することになります。「自然の構造としくみ」という科目名は単に額縁にすぎません。

「自然の構造としくみ」に託された教育理念は、教養部という制度がなくなりましたが、それが目指した専門に偏らない全人格的教育にあると思います。単に文系学生に理系の知識を提供するだけでは、「一

般」を冠した古い理系講義の域を出ません。選んだ副題を一つの実例として自然の本性を合理的に解き明かし、加えて、それらが人間および社会とどのような関わりを持っているのかをも、論じることになります。実際にこの科目を担当してみると、理系学生相手の理系講義では味わえない面白さも実感することができます。

とは、え、「自然の構造としくみ」を担当する負



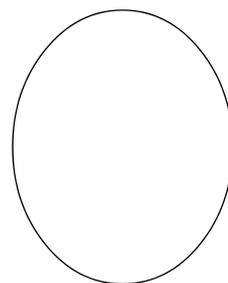
担は決して軽いものではありませんが、各専門分野  
でテーマを暖め、この科目に挑戦していただきたい  
と思います。

## 西洋の精神的遺産である古典

「西洋古典語」企画責任者 言語文化部講師 川 寄 義 和

昨年4月に本学に赴任して前任者から古代ギリシャ語およびラテン語の教育を引き継ぎ、「西洋古典語」の企画に携わっています。西欧ではかつてわが国の漢学と同様この古典語の素養が知識人に求められ、古代ギリシャ・ローマの文物を研究対象とする古典古代学（わが国では「西洋古典学」と称されます）が諸大学において研究、教育の中核を占めていたことは言うまでもありません。古典離れの叫ばれる今日においても、言語学から古文書学、古銭学、考古学に至るまで諸分野に分かれて進展し続けており、本学では史・哲・文のそれぞれに先生方がおられます。「西洋古典語」は、いわばその入門的存在と言え、またその教育は、西洋の諸学の摂取期の明治初・中期に始められ、戦後新制大学発足にともなって各大学の教養課程に教科目として組み込まれた経緯があり、特に人文学の基礎的教養の不可欠な部分を担うべきものと考えます。実際、西欧文化の源流への

憧憬から、或いは知的欲求を満たすため古典語に触れようと授業に参加する学生が数多く見られ、本学でも全学部から受講生が集まっています。とはいえ、古典語は難解であるという声を耳にします。動詞・名詞の語形変化の複雑さがその大きな原因であり、特にギリシャ語の場合千変万化であるため、他の初習外国語と同様、初級から中級、上級への移行にはかなりギャップがあるようです。目下、中級また更に上級への移行をある程度容易にし、また一人でも多く西欧の精神的遺産である古典とその言語に接してもらうことを目標とし、本質的に現代人と変わらぬ精神構造を持つ古代人の言葉にわずかにでも直に触れ、人間理解を深めてもらいたいと願っています。

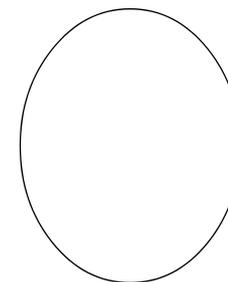


## 論理学のすすめ

「論理学」企画責任者 文学部助教授 千 葉 恵

論理学はかつて個別科学や形而上学の「道具」という位置づけをもっていた。そして、現在においても、それがあらゆる議論や推論の背後の形式的構造を明らかにするという意味で、道具としての役割を担っている。この訓練のめざすところは、言ってみれば、脳を身体から切断して、コンピューターのようになり、0と1の二値により中間の豊かな内実を削ぎ

落とし、形式的に議論を処理する能力を身(?)につけることである。ある種の人々、つまりデジタルな学生には初級の論理学はとてもたやすいものであるが、世界を全体的にふんわりと掴むことにお



いて得意な、思考が感情の座である身体に支配されやすいアナログ学生には難しく感じられている。そのような学生にとってこそ、論理学は必要な訓練である。現在、授業は通常の教科書に基づき命題論理と述語論理の習得をめざすものと、サイトライセンスを取得しており、どの教室の端末からもアクセスできる論理ソフト:タルスキーワールドに基づくものの二本立てで行われている。学生には常にディジタ

ルかつアナログであるよう励ましている。(「思想と心理」の項で「人文学の可能性」を書いたが、企画上の紹介もするようという依頼があり、ここで、付言する。この科目は哲学(倫理学)、心理学の授業内容を母体にしたものであり、古今東西のテキストに取り組みまた実験的手法に取り組みできた教官たちによる、人間に対する理解の深まりをめざしている。)

## バイオテクノロジーの時代に向けて

「生物学」企画責任者 大学院理学研究科教授 高橋 孝行

昨年度から2年間の任期で全学教育「生物学」の企画責任者を仰せつかり、1年目を終えたところです。「生物学」には、理系学部入学生を対象とした講義(生物学 Ia, 生物学 Ib および生物学 II)と基礎実験(生物学)の両方の企画責任が含まれていません。

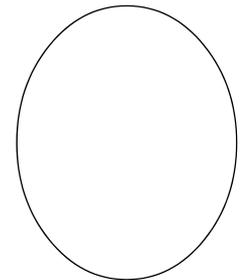
講義については、これまで1クラス当たり100名以上の履修者を対象とした講義が14~15クラスもあり、一方で履修者が十数名というクラスもありました。このようなアンバランスを解消するため、平成12年度では、講義数を増やすとともに、受講時のクラス編成を少々変更しました。こうした改善は、他部局(獣医学部, 免疫研, 低温研, 電子研)の教官の全学教育への参加協力があって実現できたものであり、ご協力に心から感謝いたします。また、全学教育では高校生物の未履修者をどのように教育するかということが問題となっており、昨年暮れに、リメディアル教育を早期に実施するという方向性が示されました。これを受けて、本年度は、生物学 Iaと生物学

Ibについて一部の学部入学生に対してリメディアル教育を導入することにしました。リメディアル教育を必要とする他の学部入学生への対応には現行の全学教育時間割の変更が必要であり、全学教育のカリキュラ

ムが全面改正される平成13年度から本格的なリメディアル教育の実施体制を整備することにしております。

基礎実験(生物学)の実験室は、改修工事後は2階に移り、5月の連休明けから実験が始まる予定です。実験室が新しくなり、より快適な学生実験を提供できる環境が整います。

21世紀はバイオテクノロジーの時代と言われ、生物学を教える重要性は益々大きくなっています。学生が、全学教育の講義と実験を通して、生物学の基礎を修得できる環境を構築したいと考えています。



## 高等教育

HIGHER EDUCATION

### 新任教官研修会のお知らせ

新任教官研修会が6月1日(木)の開学記念日に行われることになりました。「新任教官歓迎説明会」と呼ばれていたときから通算すると第6回目になります。対象は、昨年6月からこれまでの間に本学に赴任された教官全員です。

今回は、図書館北分館の北隣に竣工したばかりの教育情報館3階のスタジオ型多目的中講義室で行います。

内容は「学生評価と成績評価」というテーマをきっかけに構成することにしました。午前の部では、総長とセンター長による北大の教官としての必須の話題ののちに、本学での学生評価と成績評価に関するこれまでの経緯の解説があり、学生参加型授業の体験を行います。午後の部は、たっぷり時間をとって成績評価をテーマに小グループ討論と発表を行います。

新任教官以外の方も自由に参加して討論に加わっていただきたいと思います。新任教官以外で参加希望の方は、資料を用意しますので、あらかじめご連絡

（高等教育開発研究部：西森，電話・FAX：706-7517）下さい。

#### プログラム

日時：1999年6月1日(木)

場所：教育情報館3F スタジオ型多目的中講義室

< 午前の部 > 9:30 12:00

北海道大学とはどのような大学か？

(総長) 丹保 憲仁

倫理規定とセクシャル・ハラスメントについて

講師未定

学生評価と成績評価

(医学部教授) 阿部 和厚

< 午後の部 > 13:00 15:30

成績評価をめぐって 討論と発表

カット：氏間多伊子

## 北大における TA の問題点

高等教育開発研究部教授 西森 敏之

TA (Teaching Assistant) 制度の導入により、多くの大学院生が学部教育 (全学教育) に参加しています。この制度は広い意味での大学院教育の一貫として、教師になるための重要な実地訓練の場を与えるものです。この制度を有効に機能させるための準備の最初のステップとして、北大では、平成 10 年 3 月に初めての TA 研修会が行われ、のべ 55 名の TA が参加しました。平成 11 年 3 月に行われた 2 回目の TA 研修会にはのべ 64 名の参加がありました。今年も 3 月 23 日に学术交流会館で行われ、のべ 51 名の参加者があり、この研修会も定着しつつあります。

TA 研修会の具体的目標は、(1) 全学教育の趣旨 (目的、意義、全体での位置づけ) を理解する、(2) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心構え、教

育理論について理解する、(3) TA 相互の交流をはかる、ということで、今回まで 3 回の研修が一貫して行われてきました。

3 回とも、参加者が能動的に研修会に参加できるように、少人数のグループに分かれての討論および全体での発表討論の形式を取り入れてきました。今回はさらに徹底して、ミニレクチャーと小グループ討論で研修会全体を構成するという形式にしました。さらに、前の 2 回の経験を取り入れて、全員向けの「TA とは何か?」というミニレクチャーと対応するグループ討論のあとは、文系と理系に分かれて、ミニレクチャーとグループ討論を 1 ラウンド行い、発表は全体で行いました。文系向けには「非専門の作文指導と討論指導のポイント」、理系向けには「学生

表 2. 平成 12 年度 TA 研修会 (再掲)

		に分かれる
日時: 2000 年 3 月 23 日		
会場: 学术交流会館		
主催: 高等教育機能開発総合センター・高等教育開発研究部		
プログラム		
12:45 受付		
13:00 挨拶 (10 分)	(小講堂)	
13:10 ミニレクチャー「T・A とはなにか?」(15 分)		
13:25 グループ分け (5 分)		
13:30 グループ作業「T・A の具体的問題点を列挙する」(10 分)		
13:40 発表 (発表 2 分 7 グループ 約 15 分)		
13:55 場所の移動: 文系 (会議室)・理系 (小講堂)		
		14:00 理系 「学生実験の実際」(30 分)
		文系 「非専門の作文指導と討論指導のポイント」(30 分)
		14:30 質疑応答 (15 分)
		14:45 休憩 (15 分)
		15:00 グループ討論 (40 分)
		15:40 場所の移動: 文系・理系とも小講堂に集まる
		15:45 合同発表 (発表 3 分 + 質疑応答 3 分 7 グループ 約 45 分)
		16:30 総合討論 (30 分)
		17:00 終了

表3 アンケートの回答(全部で38通)

<p>質問 「本日のプログラムの中でもっとも有益だったのはどれですか？ 理由もお書きください。」</p> <p>文系「非専門の作文指導と討論指導のポイント」..... 2</p> <p>理系「学生実験の実際」..... 3</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際の学生実験の時にどんなことが起こりうるのかが、よくわかりました。</li> <li>・高校における“実験”から大学の“実験”へのつながりがまったくないのは自分にも思い当たった。</li> <li>・初めてをTAをやる人にとっては自分の立場とやるべきことがだいぶわかってきた。勉強になりました。</li> </ul> <p>グループ討論 ..... 9</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の立場からみた議論が十分に取れるから。</li> <li>・経験者の意見を聞くことができたため。</li> <li>・ディスカッションの練習になるため。</li> </ul> <p>グループ討論と発表 ..... 4</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他学部・外国人の意見・考えを聞くことができた。</li> </ul> <p>全体討論 ..... 2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体にわたるテーマについて頭に入ってきました。</li> </ul> <p>討論形式の研修会 ..... 7</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ディスカッション形式。議論が活発になった。</li> <li>・討論をすることで、TAとしての自覚を持ててよかった。</li> <li>・討論。ただ漫然と話を聞くだけの研修ではなく、積極的に関わることができたため。</li> <li>・短時間の中での討論、発表を取り入れてあったこと。</li> </ul>	<p>これから担当する授業で行うであろうことを自ら経験することができたから。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・短時間のうちに組織がまとまり、意見をまとめ発表する形式そのものが有益だと思いました。</li> <li>・一方的な研修会でなくこのような討論形式をとったのは正解だったと思う。</li> <li>・こういう研修が面白いし、勉強になりました。</li> </ul> <p>研修全般 ..... 6</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・すべてよかったです。ミニレクチャーは時間は短かったが、非常に勉強になりました。討論では、各自の意見を率直に話したり聞いたりする大変有意義な時間でした。</li> <li>・TAの重要な役割はわかりました。大変勉強になりました。</li> <li>・TAの授業要点及び難しいところを理解するようになった。</li> <li>・During the Professor's lecture we can apply the knowledge and also learn a lot with this experience.</li> <li>・I think this is a wonderful program in order to encourage student to participate in the educational activity.</li> <li>・I think it is a great opportunity for me, because I have learned so many things during my professor's lecture.</li> </ul> <p>役にたたない ..... 1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ほとんど無益。T.A. に対する組織枠組みの紹介、T.A. の権限、責任について不明瞭であるため。具体的な議論以前の問題です。</li> </ul> <p>無回答 ..... 5</p>
--	--

実験の実際」というテーマを選びました。前回までよりは、テーマが身近になったといえます。アンケートの回答にもその成果が現れて、参加者は討論と発表が有意義であったと答えています。

最後の総合討論では、北大のTAの制度の問題が浮かび上がってきました。これは最初のグループ討論で「TAの具体的問題点を列挙する」のときにも挙げられましたが、TAの職務の内容、拘束時間、責任範囲、報酬などが未経験者には全く不明であるということです。TAを雇用する側からの適切な対応が求め

られています。この問題は、最初のほうで述べたこの研修会の目標(1),(2),(3)からは外れていますが、避けて通れない重要問題です。

終了後に回収したアンケート回答は38通ありました。そのうちの「本日のプログラムの中でもっとも有益であったのはどれですか？理由もお書きください。」という質問に対する回答をいくつか紹介します。これらを含めて、アンケートの回答を今後の研修会の参考にしたいと考えております。

## 平成12年度北海道大学公開講座 21世紀の教育像 - 日本の未来に向けて -

平成12年度北海道大学公開講座を下記のとおり開催することが決定しましたのでお知らせします。今回のテーマは、「21世紀の教育像 - 日本の未来に向

けて - 」とし、幼児から青年・学生までの教育の現状と改革をめざす実践について紹介し、考えあいます。(内容は14ページの表4)

受付期間	平成12年6月19日(月)～6月27日(火)
実施期間	平成12年6月29日(木)～7月31日(月) 期間内、毎週月・木(祝日休み)
会場	北海道大学学術交流会館(札幌市北区北8条西5丁目) ただし第2回、第3回の会場は、会場を高等教育機能開発総合センター(札幌市北区北17条西8丁目)のE310講義室とします。
受講資格	18才以上の方であればどなたでも受講できます。(学歴等は問いません)
定員	200名
受講料	7,500円
問合せ先	北海道大学学務部教務課生涯学習担当 〒060-0817 札幌市北区17条西8丁目 電話(011)706-5252・5253(直通)

## シンポジウム「21世紀の大学院と職業人教育」開かれる

本誌No.28で既にご案内しましたとおり、去る3月10日、本学ファカルティハウスにおいて標題のシンポジウムが生涯学習計画研究部の主催で開催されました。これは、昨年度同研究部が立ち上げた「職業人大学院の在り方に関する研究会」の3回目に当たるものとして実施されたもので、各部局から選ばれた本研究会に係る学内研究員メンバーのほか、本テーマに関心を有する教官、院生及び職員の参加を得て、午後1時から約4時間にわたって活発な情報・意見交換が行われました。

シンポジウムは二部構成のかたちをとって実施され、第1部(副題:「職業人大学院における教育について」)では、筑波大学・大学研究センター長の山本眞一教授から、筑波大学大学院の事例を紹介しつつ、また、かつてご自身が社会人学生として同大学院で学ばれた経験、文部省及び大学(東京大学及び放送大学)事務局での職歴を踏まえて、多様な観点からの話題提供がなされ、次に、小林生涯学習計画研究部部長(当時)が若干のコメントをこれに加えました。続いて、筑波大学大学院における社会人教育の

表4. 平成12年度北海道大学公開講座

21世紀を目前にして、日本の教育は様々な困難と向かい合いながら、さまざまな改革が進行している。幼稚園から大学まで、学校は「知識の伝達」の教育から子どもたち自身の「学び」を重視する教育へと転進しつつある。「学ぶ意味」を考え、「主体的な学び」を創っていくために学校が地域社会と連携し、生徒や学生が「本物」を体験することで「創造性」や「問題解決能力」を育てる試みも広がっている。

	月 日	テーマ と 講 師
1 回	6月29日(木) 18:30 ~ 20:30	本物にふれる教育 - 大学と小・中学校, 高等学校とが連携した 新しい学習教育の試み - 低温科学研究所 教授 福田 正己
2 回	7月3日(月) 18:30 ~ 20:30	子どもの心の精神病理 - きれる 子どもたち - 医学研究科 助教授 傳田 健三
3 回	7月6日(木) 18:30 ~ 20:30	学校の今とこれから - 「学級崩壊」と学校づくり - 教育学研究科 教授 田中 孝彦
4 回	7月10日(月) 18:30 ~ 20:30	学校が変わる - 生徒の学びと選択を重視した学校づくり - 高等教育機能開発総合センター 教授 町井 輝久
5 回	7月13日(木) 18:30 ~ 20:30	マルチメディア社会における教育 - サイバースペースの中の若者たち - 情報メディア教育総合センター 助教授 南 弘征
6 回	7月17日(月) 18:30 ~ 20:30	地域と共同し, 学び, 成長する大学 農学研究科 教授 伊藤 和彦
7 回	7月24日(月) 18:30 ~ 20:30	世界につながる科学教育 - 数学ぎらい・理科離れと教育の新たな試み - 工学研究科 助教授 吉田 静男
8 回	7月27日(木) 18:30 ~ 20:30	21世紀の大学教育 - 大学の危機と改革の動き, どうなる大学入試 - 高等教育機能開発総合センター 教授 阿部 和厚
9 回	7月31日(月) 18:30 ~ 20:30	日本経済と教育 - 経済構造の変動と日本の教育問題 - 経済学研究科 教授 唐渡 興宣

現状に関して質疑応答が行われました。

続く第2部(副題:「社会人再教育と学際型大学院構想について」)では、学内外の2人のパネリストから、欧米及び我が国の学際型大学院について、特に公衆衛生分野の事例をもとに話題提供がなされました。1人目のパネリストである京都大学医学部の福井次矢教授からは、平成12年度に、一橋大学のビジネススクールとともに、高度な専門職業人の養成を行う「専門大学院」としてスタートすることになった京都大学の公衆衛生大学院(社会健康医学系)の構想及び設置に至る経緯について、設置準備委員会委員長の立場でかかわってこられた経験をもとに詳

細な紹介が行われました。続いて2人目のパネリストとして、本学医学部の岸玲子教授(本研究会のメンバーでもあられる)から、ハーバード・スクール・オブ・パブリック・ヘルスでの留学経験を踏まえて、アメリカの事例を中心に、海外におけるパブリック・ヘルスの分野での学際型の大学院の状況について情報提供がなされました。

最後に、第1部に関する事柄も併せたかたちでの質疑応答の時間が持たれ、各般の意見交換がなされた後、講師並びに両パネリストのコメントをいただき、閉会しました。

## センター日誌

CENTER EVENTS, Feb. - Mar.

### 2月

- 1日 ・(行事)高等教育フォーラム「高校と大学の接続について」(高等教育開発研究部)
- ・(会議)センター長連絡会
- 2日 ・(会議)第8回教務委員会
- 7日 ・(会議)全学教育科目科目責任者会議
- 8日 ・(会議)第2回教務委員会共通授業検討専門委員会実施WG
- 10日 ・(会議)第15回高等教育開発研究委員会
- ・(会議)第3回公開講座専門委員会
- ・(会議)教務委員会教職課程専門委員会
- 14日 ・(会議)第15回生涯学習計画研究委員会
- ・(会議)第57回全学教育委員会小委員会
- 15日 ・(会議)第3回SCS事業専門委員会
- 17日 ・(訪問調査)東京大学大学総合教育研究センター小林雅之教授他2名(高等教育)
- 18日 ・(会議)第30回全学教育委員会
- 21日 ・(会議)第4回公開講座専門委員会
- ・(会議)第3回教務委員会共通授業検討専門委員会実施WG
- 22日 ・(会議)第5回センター予算・施設小委員会
- 23日 ・(会議)第13回教務委員会幹事会
- ・(会議)第28回センター運営委員会
- 25日 ・センターニュース第28号発行
- ・(行事)第2次入学試験(前期)
- 29日 ・(会議)第50回センター教官会議

### 3月

- 1日 ・(会議)第9回教務委員会
- 7日 ・第2次入学試験前期合格発表
- 7日~15日
- ・入学手続
- 9日 ・(会議)第58回全学教育委員会小委員会
- ・(訪問調査)愛媛大学工学部前川尚教授(高等教育)
- 10日 ・(シンポジウム)「21世紀の大学院と職業人教育」(生涯学習計画研究部)
- ・(会議)第20回センター予算・施設委員会
- 12日 ・(行事)第2次入学試験(後期)
- 13日 ・センター研究発表会
- 14日 ・(会議)第16回生涯学習計画研究委員会
- ・(訪問調査)山口大学経済学部植村高久教授他1名(高等教育)
- 16日 ・(会議)第29回センター運営委員会
- 17日 ・(会議)第51回センター教官会議
- 22日 ・(会議)第59回全学教育委員会小委員会
- 23日 ・(会議)クラス担任全体会議
- ・(行事)TA研修会
- ・第2次入学試験後期合格発表
- 23日~27日
- ・入学手続
- 24日 ・(行事)学位記(学士,修士,博士)授与式
- 25日 ・(行事)水産学部学位記授与式
- 28日 ・(行事)教務委員会留学生教育専門委員会

# 行事予定

SCHEDULE, Apr. - Sep.

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
4月	6(木)	新入生オリエンテーション	
	7(金)	入学式	
	10(月)	学部ガイダンス	
	11(火)	第1学期授業開始	
	20(木) ~ 21(金)	2年次以上履修届受付	当該学部
	21(金)	追加認定試験成績締切	
5月	21(金) ~ 24(月)	1年次履修届受付	
	上旬 ~ 下旬	定期健康診断	
6月	1(木)	開学記念行事日	休講
	1(木) ~ 4(日)	大学祭	休講
7月	21(金)	第1学期授業終了	
	24(月) ~ 8月4(金)	補講日	
8月	7(月) ~ 18(金)	夏期休業日	
	21(月) ~ 9月1(金)	定期試験	
9月	5(火) 正午	定期試験成績提出締切	
	5(火) ~ 8(金)	追試験	
	8(金) 正午	追試験成績提出締切	
	中旬 ~ 下旬	学科等分属手続	当該学部

写真2. 新築なった情報教育館

## 編集後記

放送大学との合築で情報教育館ができ、高等教育開発研究部と生涯学習計画研究部が4階に移り、当センターが平成7年に発足以来初めて両部がすぐ近くで活動できるようになりました。入学者選抜企画研究部も1部入ります。情報教育館の目玉は3階のスタジオ型多目的中講義室で、マルチメディア対応にする計画で、新任教官研修会やTA研修会のほか様々な研究会に利用できます。残念ながら現時点では未整備ですが、はやく有効に利用できるための設備が調うように願っています。(羽)

## センターニュース 第29号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2000年4月27日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・山口佳三

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center